



## 『Kさんから学んだ命の大切さ』

東奥学園高等学校

私は、小学校4年生の時、交通事故で父を亡くしました。家族5人でうきうきしながら、食事をしようとして向かっていた時の事です。対向車と衝突し、土手から転落。私たち兄弟3人は軽症で済みましたが、母は重症、父だけが亡くなりました。

母の入院中、叔母や祖母は本当に一生懸命世話をしてくれました。そのかいあり徐々に元気になっていく母の姿に、看護や介護の大切さを目の当たりにしました。私が介護の道を志すのはそんな自分の体験がもとになっています。

学校では、色々な施設で実習をさせて頂いたり、ボランティア体験を積み重ねながら、学習しています。そんな中、1年生の実習で自分の志している道について、改めて深く考えさせられる出来事がありました。

利用者のKさんは、いつもにこにこ笑っている方でした。いつも通り排泄介護を行っていた時のこと、Kさんはいつもと変わらぬ笑顔で、唐突に「早く死ねればいいのにな。」とおっしゃったのです。

私は父の事もあり、失った命は二度と取り戻せない、簡単に手離していい命は一つもないと、いつも思っていました。でもその時はとっさにKさんにどう応えていいのかわからず、いつもどおり振舞うことで精一杯でした。ところが、しばらく経って何かガストンと落ちてくるような、そんな感覚があったのです。

もし自分がKさんのような状態になったら何を思うのだろう。自分でやりたいことも思うように出来ず同じ日々の繰り返し「死んでしまいたい」と思ってしまうかもしれません。

Kさんの口から漏れた「早く死ねればいいのにな。」という言葉、それはいつもKさんの心の中にある隠された思い、それを伝えたかったのか、単にふと思ったことが口に出てしまったのか、今の私には想像することも出来ません。介護とは相手の心に寄り添い、言葉を傾聴し、援助し支えることだといいます。利用者の方々は私たちより、遥かに長いときを生きています。そんな方々が抱えている思い、それを押しはかるのは難しくても、今このときを生きて、今この時の思いを、想像することは出来るかもしれません。

表現の困難な方の思いを、想像する力を磨くこと、また、推し量ろうと努力すること。援助し、支えるということも利用者の立場になって考えてみると、また新たな気づきがきっと生まれてくるはずです。

私はこれまで、自分が体験した事故のことをはっきりと人に伝えることはできませんでした。でも、今は違います。父が必死に守ってくれた命です。毎日を大切にしっかり前を向いていかなければならない、と自分に言い聞かせるようになりました。だから伝えたいのです。今度またKさんに会うことができれば「私はKさんにもっともっと会いたいな、Kさんの話をもっともっと聞きたいな」Kさんはうなずいてくれるでしょうか。

Kさんとの出会いから、私は、自ら進んで心を開くこと、そして日々の関わりの中で生まれてくる思いを、自分のこととして考えること。それが命を大切にする第1歩なのだと、学んだように思います。

明るく挨拶をする、笑顔で接する、想像したことを自分の言葉に置き換えてみる。温めた手をそっと触れながら言葉をかける、これらひとつひとつの積み重ねが、きっとより良い介護につながっていくはずです。まずはゆったりと細やかな心配りができる自分共に笑顔で過ごせる自分、そんな自分になりたい。わたしは心から願っています。